青年期を迎えた軽度発達障害者への進路選択を促すオリエンテーション活動

—北海道ＹＭＣＡ　ＬＤ支援プログラムの実践から—

二宮信一、太田深雪、清水里美、新保秀実
（北海道ＹＭＣＡ）
滝澤　聡　　成田正則
（札幌医科大学大学院）　（北海道大学研究生）

＜要旨＞

北海道ＹＭＣＡのＬＤ支援プログラムにおいて、進路選択期を迎えたＬＤ及びその周辺の高校生と専門学校生に意図的な様々な活動を提供することを通して、社会との接点を増やし、進路選択に向けた準備を促すことを目的とした活動を行った。その活動の中で、高校生はまだ現実的な次元で将来像を捉えておらず、将来への展望を見通す機会の提供の必要性が示されたが、その前提として自己決定の経験や興味・関心の広がり、自己効力感、ポジティブな自己像の形成が重要であり、このような自己形成を促す活動も必要であることが示唆された。専門学校生は、現実の就労に対しての意識は高いものの、自らの希望と適性・実力との差は大きく、本人の自己理解や入学目的などを自覚できる活動が必要であることが課題となった。しかし、このような自己理解・就労の指導については、学校と家庭との協働の上に成り立って行われるものであると考えられ、保護者自身の子どもの抱える課題の受容の問題もあり、学生本人だけでなく、保護者への働きかけや支援も欠かせないという、課題が浮き彫りになった。

＜キーワード＞
軽度発達障害、青年期、進路選択、自己形成、自己理解

【はじめに】

ＬＤ児・者の教育的支援の乏しい中で、北海道ＹＭＣＡでは 1995 年より関係機関との連携の中でＬＤ支援プログラムを開始し、現在 150 名に及ぶ登録を得るに至っている。当初、小中学生を中心としていたこの活動も、1998 年よりソーシャル・スキルの獲得を目的とした高校生を対象とする月１回のグループ活動（以下ドリーム・クラスと称す）が開始され、2000 年には北海道ＹＭＣＡが設置する札幌ＹＭＣＡ国際ビジネス・社会体育専門学校（以下ＹＭＣＡ専門学校と略す）にＬＤ及びその周辺の青年も受け入れる２年制のコースとして国際ビジネス科にビジネス・スキル・トレーニング・コース（以下トレーニング・コースと略す）を設置した。本実践は、進路選択期を迎えた彼らに意図的な様々な活動を提供することを通して、社会との接点を増やし、進路選択に向けた準備を促すことを目的としたものであり、その成果から青年期を迎えた彼らに必要な経験、情報を明らかにし、今後の指導のあり方について検討するものである。

１、ドリーム・クラスの活動

高校生を対象としたドリーム・クラスの活動は、月１回土曜日を活用し年９回行われた。参加高校生は９名で、ＬＤクラス指導者１名とボランティア２名が指導にあたった。プログラムの立案は、担当の指導者とボランティアによってなされ、１回の例会に対し準備と

評価を合わせてそれぞれ３回程度のミーティングの機会を持ち、参加高校生の評価、課題の把握を行い、プログラム立案との連関を図った。また、月１回ＹＭＣＡで行われるＬＤ学習会に参加し、ＬＤへの理解、指導法についての学びを深めた。

参加した高校生の男女別学年人数は表１の通りである。この中で、ＬＤ及びその周辺と判断された者は８名、高機能広汎性発達障害が１名であった。また、９名中７名が中学からＹＭＣＡのＬＤプログラムに参加している継続生であった。

表１　男女別学年人数

	男子	女子	計
１年生	2	1	3
２年生	2	1	3
３年生	3	0	3
合計	7	2	９名

表２は参加高校生の在籍高校別の人数である。高等養護学校在籍者の内、中学より特殊学級に在籍していた者は１名、高校進学段階で高等養護学校を選択した者は２名であった。

表２　在籍高校別人数

普通科高校	3	高等専修学校	1
定時制高校	2	高等養護学校	3
		合計	９名

参加高校生の状況は、中学時よりも生活環境が改善され、学校生活等におけるストレスは軽減されている場合が多く見られた。

しかし依然として、対人関係を築き維持していくことや自分の気持ちを言葉で表現することに苦手さがあったり、興味や関心の偏狭から生活範囲・行動範囲が狭い、低い自己評価、無気力などが窺われ、活動においても「どうすれば皆で楽しくなるか」等という考えを持ち辛く、集団の中で自分を生かせない、不測の事態が起きるとパニックになるなどの様子から、自分で考えて行動・決断する経験が少ないことが窺われた。

このような参加高校生の状態から、ドリーム・クラスの活動のねらいとして、早期の段階で以下のようなポイントを設定した。

①対人関係を円滑にするためのスキルを「楽しい」経験を通して身につける。

②自己決定の機会を増やし、自ら役割を担い、グループ活動を通して他者を受け入れる経験を積み、他者と自分との関係を知る。

③様々な体験から新たな興味や関心を広げるとともに、自分で交通機関や社会的資源（施設・店等）を利用できるよう余暇を楽しく過すための必要なスキルを身につける。

④就労・進学に向けて自己効力感やポジティブな自己像が持てるよう経験を積ませ、主体的に自己選択していく姿勢をつくる。

このようなねらいを柱として、例会毎に参加高校生一人一人の活動状況、到達点を見極め、プログラムの検討を行い、目標を設定し実施した。表３は 2001 年度に行われた年９回の活動一覧である。

表３　ドリーム・クラス　活動一覧

５月テーマ　「イントロ☆ゴー」	
	ねらい ・グループ内で交流を深め、新しい仲間の事を知る。 ・今年のドリーム・クラスのイメージを作り、一年間の見通しを持つ。
	主な活動 ・体育館でゲーム（中学生グループとドッヂボール対決） ・茶話会（買出し、アンケートトーク、好きな曲をかける、去年の活動紹介、今年やってみたい事を語り合う）
６月テーマ　「一致団結パーティ」	
	ねらい ・少人数グループに分かれ、一人一人が必ず何らかの役割を担う。 ・緊張をほぐし、自分の居場所、位置をつかむ。

主な活動
・料理（グループ分け、役割分担を綿密に行う。）
・出し物、ゲーム（ワンツーゲーム、ジェンガ）
・次月の計画、準備（パークゴルフのルール調べ、昼食の相談、問合せ電話かけ）

7月テーマ　「パークゴルフ大会」

ねらい
・グループの凝集性を高める。
・余暇の過し方を考える。
・交通機関、飲食店の利用マナーを身につける。

主な活動
・パークゴルフ（ルールの確認・グループ対決）
・ファストフード店で注文、食事
・次月の相談、計画

9月テーマ　「ボーリング大会」

ねらい
・前回皆で話し合い、決定した事を実行する。
・現実的に、実行可能な案を考える。
・時刻表の見方を身につける。

主な活動
・ボーリング大会
・次月の相談・計画（ＪＲを使って皆で観光に行ける所を探す）

10月テーマ　「おたるへＧＯ！！」

ねらい
・グループで皆が楽しく行動できるように考える。
・観光という事を楽しむ。
・自分でお金の使い方を考え実行する。

主な活動
・小樽観光～博物館、運河食堂、ロンドンからくり博物館、土産物屋
・食事場所をグループ毎に決める。

11月テーマ「就職勉強会+鍋パーティー」

ねらい
・自分の進路を考える。
・進路について自分の思いを語り、友人の思いを聞くことで、自分自身の問題としてあらためて考える。

主な活動
・鍋の材料の買出し、下ごしらえ
・鍋を囲んで団欒、即席モノマネ大会
・社会体験・職業実習経験者は、レジュメを作って体験発表

12月テーマ
「きみはｻﾝﾀｸﾛｰｽになれるか!!!?」

ねらい
・小中学生のために、何かできる事をやり、その喜びを経験する。
・自分達で作る楽しさを実感する。

主な活動
・クリスマスの食事作り
・小中学生会場セッティングの手伝い
・サンタクロースのパフォーマンスの計画、実行

2月テーマ
「３月例会のプロデュースをしよう」

ねらい
・自分たちでやりたいことを何もない状態から考える。
・何が良いか判断する機会に合う。
・卒業ということを意識し、仲間の大切さを意識する。

主な活動
・３月の例会の相談、卒業生を喜ばす秘密の計画を考える。
・即席似顔絵大会

3月テーマ　「思い出パーティ」

ねらい
・時間の限界性を理解する
・仲間を大切に思う気持ちを育む
・１年間を振り返る

主な活動
・パーティの準備（ステージ作り、アルバム作り、買い物）
・パーティ

活動の中で、自分達で企画する場面を例会毎に多くし、グループでの討議を通した自己決定とそのプログラムが実際に体験できるように設定したことにより、高校生の中に積極性、協調性が見られるようになった。このような活動から、以下のような経験が積むことができたと思われる。

①基本的なスキルの習得と活用
②情報の収集、選択
③チームで取組む際の自己の行動のあり方
④社会資源の活用、余暇の過し方
⑤人の役に立つことの喜び

特に 11 月例会の就職勉強会では、在籍高校において職業実習に参加した者の話を直接聞く機会として設定した。例会の中では、友人の考えを聞くことを通して、自分自身の問題としてあらためて考える機会を提供すると共に、それに基づいて一人一人が進路について自分の思いを発表する場を設け、自分の考えを自覚したり、まとめたりする機会とした。学年によって意識の差はあるもののほとんどの高校生は現実的な次元で将来像を捉えておらず、このような活動を通した将来への展望を見通す機会の提供の必要性が示された。しかし、その前提として、活動の「ねらい」にあるように自己決定の経験や興味・関心の広がり、自己効力感、ポジティブな自己像の形成が重要であり、このような自己形成を促す活動も必要であることが示唆された。

2、専門学校生への活動

専門学校生を対象とした活動は、トレーニング・コースの授業の一環として「社会調査実習」という科目で 28 回実施した。学生は２年生８名で本コースのスーパーヴァイザーの助言のもと、ＬＤ指導講師１名が担当した。

ＹＭＣＡ専門学校のトレーニング・コースは、1)基礎学力の養成、2)生活自立の方法の習得、3)対人関係の練習、4)社会人へのステップ（意識変化とスキルの獲得）、5)課題解決の方法の習得、6)ポジティブな人生観の育成の６項目を基本コンセプトとして運営されている。

表４は在籍者の男女別人数で、ＬＤ及びその周辺が３名、高機能広汎性発達障害２名、軽度知的障害２名、その他１名であった。また、表５は出身高校別人数、表６が入学前の学歴又は経験、表７が入学時の年齢分布である。

表４　男女別人数

	男子	女子	合計
２年生	5	3	８名

表５　出身高校別人数

普通科高校	6	定時制高校	2
		合計	８名

表６　入学前の学歴又は経験

普通科高校卒	3	短大中退	2
専門学校中退	1	就労経験	1
専門学校卒	1	合計	８名

表７　入学時の年齢分布

年齢	18	19	20	21	28	合計
人数	1	2	1	2	2	8

トレーニング・コースには、表６で見るように短大中退者、就労経験者なども含まれ、卒業時 30 歳を迎えた者もいた。

授業は全日制の学校として一般科目（国語表現法、社会常識等）、ビジネススキル科目（計算実務、ペン字等）、生活スキル科目（ソーシャル・スキル、生活と健康等）、総合選択科目（水泳、造形絵画等）などがあり、社会調査実習はその中のビジネススキル科目の一つとして設定されている。就労に向けて、それ以外にも障害者職業センターでの適性検査や一般企業での職場実習などが行われている。

専門学校生はそれぞれ、対人関係を円滑に保てない、場面に合った行動の選択・実行が苦手などの社会性や注意集中、整理が苦手、融通がきかない、不器用などの行動面の問題、文章、指示理解が困難などの認知面や緊張、不安、自己評価が低い、感情表現が適切にできないなど心理面の課題等を負って入学している。そのような中で、社会調査実習は以下のねらいで行われた。

①社会資源についての知識を増やし、利用の仕方を知る。

②自分達で計画し実行することで、問題解決の体験をし、担当として責任感を培う。

③学校外での行動を考え、社会人として求められることを考える。

④就労へ向けて準備をし、意欲を高める。

すでに、１年次に将来の余暇の使い方を視野にいれた学生達が楽しめる活動を多く行っていたので、２年次では④の目的を意識し、「訪問・見学」「就労体験を聞く」「ビデオ視聴と話し合い」の三本立てで活動を展開した。

「訪問・見学」は、就労への準備となる企業や社会資源として知りたい所を選んだ。訪問先ごとに自分達で計画を立て交渉等も行わせた。学生たちの就労に対する意識は高く、職場として見ようという意欲も強かった。そのため製造現場や工場が比較的多かった。

「就労体験を聞く」は、数回ではあったが社会人の話を聞く機会を設けることができ、障害者サポートセンターの訪問や就労が困難な状況にあるＡＤＨＤの診断を受けた青年との話し合いも持った。これらは学生達が直面する現実問題を考える機会と共に自己理解を促すねらいもあり、学生によっては共感しながら聞くことができていた。

「ビデオの視聴と話し合い」では、従業員達が働く仲間として成長していくテレビドラマを取り上げた。娯楽性もあり、視聴の動機づけは高かった。話し合いは参考図書（『「王様のレストラン」の経営学入門』川村尚也著 1996 扶桑社）のディスカッション・ポイントに基づいて行った。表８は、2001 年度に行われた社会調査実習の一覧である。

表８　社会調査実習　活動一覧

４月	講義・話し合い ・社会調査実習とは何だろう？ ・見学先の希望調査 ・体験を聞く一児童相談所の仕事
	外出・訪問 ・中島公園－サウンドスケッチ
５月	講義・話し合い ・一学期の見学計画 ・ビデオ視聴と話し合い一王様のレストラン ・体験を聞く一病院の保育士の仕事
	外出・訪問 ・中島公園一花見 ・札幌市生涯学習センター ・イシヤチョコレートファクトリー
６月	講義・話し合い ・ビデオ視聴と話し合い
	外出・訪問 ・ケーズシステム（コンピュータ会社）
７月	外出・訪問 ・北海道放送 ・グリーンホテル
８月	講義・話し合い ・チームに分かれ見学の計画 ・ビデオ視聴と話し合い
９月	講義・話し合い ・見学予定の確認
	外出・訪問 ・読売新聞社札幌工場 ・裁判所一傍聴
10月	講義・話し合い ・見学予定の確認 ・講演－エイズについて ・模擬裁判 ・障害について考えよう
	外出・訪問 ・コカコーラ工場 ・マテックプラザ（リサイクル処理工場） ・いーないーず（障害者サポートセンター）
11月	講義・話し合い ・見学予定の確認 ・職場での問題解決方法を考えよう ・見学先へ礼状を書く
	外出・訪問 ・北海道警察本部 ・ペットショップ
12月	講義・話し合い ・就労問題研究会（ＡＤＨＤを持つ女性の話を聞く）
１月	講義・話し合い ・ビデオ視聴と話し合い ・体験談を聞く一就労を考える若者 ・ＡＤＨＤ自己アセスメント（自分を見つめてみよう） ・ビデオ視聴と話し合い

訪問後は、分かったこと、疑問に思ったこと、感想などを記録として記入し、体験的に学んだ事柄を客観的に振り返ることができるようにした。また、二学期以降は、社会的な経験の積み重ねと主体的な活動となるよう訪問先との交渉なども学生が担当した。ビデオ視聴では、登場人物の気持ち・人間関係・仕事の仕方や不満対応作戦などを考え、討論した。

このような活動を通して、一部の学生達には卒業後の進路について、現実的な観点から考えるようになっていったが、そこで見えてきたのは、自らの実力であり、抱える課題であった。それは、この社会調査実習と連携して行なわれたソーシャル・スキルの授業や企業実習がその背景にあると考えられるが、しかし、実践的に社会の現場に出て行って体験できたからこそ辿りついた事柄でもあったと考えられる。またその一方で、自らの適性と進路を見出せない学生もおり、どのようなアプローチが必要であるのか課題を残した。

また、このような活動と並行して保護者との面談も行い、卒業後の進路についての話し合いがもたれたが、学校が本人の成長を評価しても、家庭では何ら評価されていないといったケースが複数あった。これは、本人の自己受容を支える家庭という関係ができていないばかりか、トレーニング・コースを選択しつつも、保護者が子どもの躓きについて受容していないことを示唆すると同時に、保護者自身がそのような子どもの親であるという親の自己受容の困難さを示したものと言えるであろう。

3、考察

この進路選択を促すオリエンテーション活動を通して、高校生では「自分を表現する」「自分が役割担う」ということで声掛けも非常に増え、話題の共有、互いの事を知り合うなど楽しさが随所で生まれた。小グループに分けて役割分担を明確にしたことも、自分がするべきことを把握し行動するよい手立てになったと思われる。また、「問合せ・注文の電話をかける」「時刻表を調べて電車に乗る」などのタスクをじっくりリハーサルした上で実行する事で、見通しをもった行動ができるようになり、成功体験を積むことができ、周りからも評価され、このような達成感から自己評価も上がったことが窺われた。このような中で、就労・進学の問題を自分の課題としてポジティブに受け止めるよう促すことができた。その一方で、自己に対する理解が未だ曖昧で、自分から何かをするという実感がなかなか持てない参加高校生もおり、課題も残された。

個別の差異はあるものの、進学・就労という問題は高校生にとってなかなか現実的な事柄とならない状況にあると言えるが、充分な配慮ある指導の中で、小・中学校の生活の中で作られたネガティブな自己像や意欲の喪失を回復していく活動が高校生にとって優先的なものであることが窺われた。

専門学校では、責任ある役割の体験、社会資源の活用、障害について考え、自己を見つめること等につなげることができ、全体的には、新しい体験、視野の獲得などにおいて成果が見られた。また、それぞれの訪問後に記入する自己評価表も、理解したこと、分かったことなどを記録し確認する上で学生の成長がみられ役立った。しかし、記録のためのメモに精力を使い、見学自体がおろそかになる傾向もあった。

進路選択のオリエンテーションとしては、学生達の就労への意欲もあり積極的な参加が見られた活動であったが、現実の就労に対しては、自らの希望と適性・実力の開きを埋めるには至らず、幾分働きかけが弱かった。しかし、その前提として、専門学校入学前までの本人の自己理解や入学目的などの曖昧さもあり、この面での指導のあり方をめぐっ

て、労働・作業体験なども加えるなどより現実に即したカリキュラムの検討が必要であることが課題となった。また、このような自己理解・就労の指導については、専門学校と家庭との協働の上に成り立って行われるものであると考えるが、保護者自身の子どもの抱える課題の受容の問題もあり、学生本人だけでなく、保護者への働きかけや支援も欠かせないという、課題が浮き彫りになった。尚、卒業後のフォローアップとして、卒業生対象のプログラムも行われている。

以上、見てきたように、進路選択を促すオリエンテーション活動を展開していくにあたって、直接的な進路へのアプローチの情報提供、体験的学習が必要であることは言うまでもないが、その活動が有効に機能するために、高校生、専門学校生ともにその前提となる事柄が明らかになった。今後の課題として、高校生に対しての自己形成を促す活動、専門学校生への自己理解を促す活動について引き続き取組んでいくことの必要性が示された。また、保護者との連携やその連携を有効にして行くための保護者支援についても取組む必要があることが示された。